

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

「重監房を考える」シンポジウム 群馬県前橋市で開催

3月1日(土)、シンポジウム「重監房とは何だったのか ハンセン病隔離政策の『負の遺産』を考える」(厚生労働省主催)が前橋市ベイシア文化ホールにて開催された。資料館から黒尾和久学芸課長がパネリスト、佐川修運営委員が会場発言者として参加した。

主催者は、シンポジウム開催趣旨を「ハンセン病に対する隔離政策の歴史において、国立療養所栗生楽泉園内に設置されていた重監房の実情を負の歴史として後世に伝えるとともに、ハンセン病に対する偏見・差別の解消をめざします」とパンフレットに明記した。

この目的を果たすための国立の「重監房資料館」を栗生楽泉園内に今年度早々に開館することを、群馬県民に周知するのも、今回のシンポジウムの目的であった。

シンポジウムは、市民団体による合唱、田村憲久厚生労働大臣(代読)の主催者挨拶、大澤正明群馬県知事(代読)、黒岩信忠草津町長、藤田三四郎栗生楽泉園入所者自治会会長による来賓挨拶の後、宮坂道夫新潟大学医学部教授による基調講演「重監房について」で幕を開けた。

宮坂氏は、「なぜ、療養所に懲



出土品をスライドで紹介する黒尾学芸課長

罰施設があったのか」「なぜ、医者・医療者が患者を罰したのか」「なぜ、裁判を受ける権利が与えられなかったのか」「なぜ、多数の収監者が死ななければならなかったのか」という四つの「なぜ」を手がかりに、重監房が設置された経緯、さまざまな運用実態、引き起こされた悲劇について丁寧に解説した。さらに自ら携わった重監房復元運動を振り返りながら、復元の意義をアウシュビッツ収容所等と同じく、人類の「負の遺産」として

での普遍的価値をそこに見出したからだと説明した。

宮坂氏を進行役とするシンポジウムにはパネリストとして笹雄二栗泉園入所者自治会副会長、鮎京真知子弁護士そして黒尾の3人が登壇した。

重監房復元の発案者である笹氏は、自らの入所者としての経歴について述べた後、建物解体前に目撃した重監房の具体的な様子や底知れない恐怖を感じた心象を語った。その上で、国民も参与した無頼運動を背景にした重監房へのハンセン病患者の移送、そこで行われた出来事こそ、ハンセン病患者への最も酷い差別を象徴している。なぜ人が人をこのような惨い目にあわせてしまうのか、今日を生きる人も、その歴史的事実から目をそむけず、他人事ではなく自分の問題として、まずは知り、そして考えてほしいと訴えた。

ハンセン病違憲国家賠償請求訴訟に携わった鮎京氏はまず、裁判後に問題提起された重監房復元への笹氏等の思いについて触れた。さらにハンセン病問題対策協議会や歴史的建造物の保存等の作業部会等での厚生労働省との粘り強い交渉について、時系列に沿って詳細に解説し、その成果として、重監房跡地の保全や重監房資料館の建設が実現したことを熱く語った。

黒尾学芸課長は、笹・鮎京報告を受けて、重監房の復元に資するために厚生労働省が行った跡地の発掘調査成果を報告した。スライドを見せながら、まず重監房復元に必要な建築部材や工法に関する情報を得たこと、重監房が監禁施設だった物証となる複数の南京錠が出土したことを説明した。次いで便槽を中心に、証言や映像資料に合致する弁当箱・椀・箸そして梅干の種等が出土したこと、眼鏡のフレームや下駄等、収監者の持ち物が出土したこと、さらに飲料瓶・薬瓶、牛の骨や卵の殻等の食糧残渣が出土、これらは収監者が厳しい環境下でも生きていられるように、外部から差し入れがあった可能性を示すと解説した。これらの出土遺物は重監房資料館における貴重な展示品になるだろう。

時間の関係でパネリスト間での討論は行えなかったが、会場から重監房の運用時に朝夕の食事を運搬した生き証人・佐川修氏による証言、さらに栗泉園の元職員員の赤尾さん、栗泉園ボランティアガイド養成講座に参加した専修大学学生の花岡さんが重監房の「記憶」を語り継いでゆく決意表明を行い、ホール内に響く共感の拍手でシンポジウムはフィナーレを迎えた。最後に神美知宏全療協会長が閉会の辞を述べハンセン病問題の現状と課題にふれながらシンポジウムを総括し、予定を1時間近くも超過してシンポジウムを終了した。

中国のハンセン病回復者

林志明さんの書画作品展

当館では、4月5日から5月11日まで、中国のハンセン病回復者である林志明（リンチミン）さんの作品展を開催する。林志明さんは、一九二九年、広東省南部の貧しい農家に生まれ、8才の時にハンセン病と診断され、現在はハンセン病療養所で暮らしている。一九六一年には病気の治癒とともに社会復帰したが、その後、ハンセン病回復者であるという理由で職を追われることと

なった。路上で自作の書や絵を売り、生計をたてるなど、その人生は苦難の連続だった。

中国では、一九五〇年代後半から一九六〇年代初頭にかけ、ハンセン病患者を隔離する村が中国全土に約八〇〇カ所作られた。そこへ患者収容がすすめられ、化学療法による治療が行われた。しかし、町から離れた山奥に村を建設したため、家族とも引き離され、生活環境も良いとはいえない状況であつたという。

林さんは、中国の回復者支援組織である広東省漢達康福協会（ハング）の一員として、広東省各地のハンセン病療養所・村の現状を把握するための調査活動を積極的に行つた。そしてこうした状況を

不自由な手で書を書く林志明さん

広く伝えようと15年もの歳月をかけて『苦難不在人間』を書き上げた。自身を含めた実際のハンセン病患者・回復者をモデルに彼・彼女らのおかれた境遇を鮮明に描いた小説として大きな反響があり、香港でも出版された。一九八〇年頃から絵も描き始め、特に牡丹を好んだ。その理由を聞くと、「花の中でも最も美しいから」と答え、さらに「美しい絵を自分が世を去った後も残したい。」と続けた。色鮮やかな作品一点一点を林さんは丁寧に描く。林さんはこうした

作品を自身の感情に重きを置いた「写意」の技法で描いたといい、一つ一つの作品には林さん自身が表れていると感じられる。

一九九八年、中国政府はハンセン病を「制圧」したことを正式に表明した。一方、現在も回復者の村は全国に約六〇〇あるといわれ、回復者への偏見・差別も残っている。近年活発化している若者を中心とするボランティア活動をはじめ、より広範な回復者への支援や社会に向けた啓発活動が必要とさ

各園文書資料・予備本調査
今年も施設、自治会、盲人会で

れている。

本展では、牡丹の他、鳥や虎、書など、新作を含めた林さんの作品22点を展示するとともに、現地で回復者への支援活動を行っているハンダや学生ワークキャンプを指揮するJIAの活動も紹介する。なお4月5日、午後1時半から3時半まで当館映像ホールにて林さんによる講演会を予定している。多くの方のご来場をお待ちしております。

資料館日より82号で既報の通り、国立ハンセン病資料館では二〇一三年度からの3ヶ年計画で、ハンセン病療養所各園の文書資料調査を行っている。調査の目的は、各園の施設、自治会、盲人会等、それぞれの組織が保管している文書資料の目録を作成することである。作成する目録は、基本的に簿冊（ファイル）レベルのものであり、簿冊にファイリングされている個々の文書の件名は取り上げない。二〇一三年度における調査実績は以下の通り。

- 二〇一四年
 - ・1月26日～2月3日、奄美和光園（施設、自治会）本調査。
 - ・1月29日～31日、長島愛生園（自治会）予備調査。
 - ・2月17日～21日、邑久光明園（施設）本調査。
 - ・2月19日、邑久光明園（自治会）予備調査。
 - ・2月20日、邑久光明園（盲人会）予備調査。

予備調査の結果をもとに、本調査での調査方法を定める。資料の撮影、目録作成が本調査の基本作業となる。邑久光明園（施設）では、分館の日誌や、一九三四年の水害時のものを含む外島保養院関係の資料等が確認された。

さらに、邑久光明園での本調査では、資料1点ずつを中性紙封筒に封入し、その封筒を中性紙の文書箱に納める作業を行った。中性紙の封筒や文書箱は文書資料の保存に適しており、文書資料の劣化を抑えることができる。保存環境が良好でない場所、あるいは劣化が進んでいる資料も少なくないの



調査後の状態（邑久）

在園保障作業部会

職員定員化問題の解決を

昨年12月25日、ハンセン病療養所の職員問題について、厚生労働省大臣室で交渉の際、田村厚労大臣は「平成26年度は45名削減するが、介護職員の定員を46名増員するので1名の増員となる」と説明し「今後5年間はこれを踏まえて対応するが、その後は減員せざるを得ない。しかし、最終年度の水準を低下させることはしない」と発言した。

これを受けて今年1月27日に厚労省仮設第2会議室で、在園保障作業部会が開かれた。国立病院課は削減される部門の説明を行い、「定年で48名の退職者がいるが、



統一交渉団と国立病院課の作業部会

そのうち34名が再任用を希望、退職は再任用で埋まる。短時間勤務を望む者には、短時間勤務40名を別枠で設定した」と述べた。

その結果、平成26年度の定員枠は、定員分46名と定年退職者分14の合計60の枠ができ、賃金職員は60名が定員化されることになった。また、退職者の後補充についてはこれまでのような新規採用抑制がなくなつたので、積極的に採用を図ること、定員退職の調理員の補充は、再任用短時間職員または期間業務職員として確保する、と説明した。

削減から増員になったことは一応評価できるが、一方を削って一方を増員するという方式で、常にごく一部の部署の削減が必要になっている。これは国会決議より優先するらしい閣議決定があるからだ。今後5年間、療養所内での職員削減が継続できるのか、はなはだ疑問である。そのため定員については「入所者1人につき、介護職員何人という基準設定やルールをつくること」、「対応関係のシミュレーションを検討すること」などの意見も出ている。

以上が作業部会の内容だが、その後弁護士会館に戻り、今後の対応について、また各園の将来構想についての報告も行われた。

作業部会出席者は、国立病院課古川課長外5名、全原協・堅山事務局長、全療協・神会長外・本部支部代表9名、全国弁連・徳田弁護士、赤沼弁護士外6名。

春季企画展

「不自由者棟の暮らし」ハンセン病療養所の現在

4月26日(土)から7月27日(日)の期間に二〇一四年度春季企画展「不自由者棟の暮らしーハンセン病療養所の現在ー」を開催する。不自由者棟とは、後遺症の悪化や合併症の併発・高齢化で日常生活が困難な入所者を援助するための設備を持つた、介護員・看護師が常駐する場所である。本展は次の3つのコーナーから、不自由者棟の歴史と現況を伝えるものである。

「1、不自由者棟の歴史」では、患者が患者を介護していた「不自由舎」の時代、不自由者を中心にした患者運動によって不自由舎看護職員切替えが実現した患者運動の歴史、切替え開始後の不自由者棟の変遷を、写真等で展示する。

「2、全国の不自由者棟」では、国立13療養所の不自由者棟の現状を解説したパネルを展示する。

「3、不自由者棟の暮らし」では、

入居者の暮らしの諸相を映像、写真、実物資料で展示する。白杖、電動車いす、ヤットコなど、目・手・足が不自由な入居者にとって大切な道具や、介護・レクリエーションの写真が並ぶ。

今回の展示からは、過酷な療養生活を送った入所者が、少しずつよりよい暮らしを手に入れてきたことがわかるだろう。他方で、オムツ、夜間帯の介護の写真、職員増員を求める「実力行使座り込み」看板の写真、各後遺症及び必要な介護の割合をまとめたパネルから

は、将来更に手厚いケアが必要になるという課題も見えてくる。

今年は全患協が不自由舎看護の職員切替え実現を求めた六・五闘争から50年目にあたる。歴史を踏まえ、不自由者棟の現状を知ることとは、回復者や療養所への認識を深め、将来を考えるきっかけになるはずだ。

会期中、不自由者棟の歴史・現在をテーマにした付帯事業も開催する。詳細は決まり次第HPで報告する。多くの方のご来場をお待ちしております。

入館者30万人に到達

3月18日、開館以来の来館者数が遂に30万人に到達し、記念のセレモニーを行った。成田館長と語り部の佐川さん、平沢さんが参列し、30万人目の来館者と一緒にく

す玉を割り、記念品を贈呈した。記念すべき30万人目は、埼玉県志木市の蛭田千秋さん。突然のことに驚いた様子だったが、「今まで関心があったので、少しずつでも学ぼうと思って訪れた。周囲の人たちにも伝えていきたい。」とコメントしてくださった。

当館は、設立からの12年間は午後のみの開館だった。その後1年半の休館を経て、07年からは国立ハンセン病資料館となり、昨年20周年を迎えた。近年は毎年2万3千人前後の来館者を得ている。30万人到達は、設立以来館を支える方々を励ましたようで、「次は50万人を目指してがんばる」と平沢さんが思いを語った。これまでご来館くださった皆様に、感謝申し上げます。



祝 国立ハンセン病資料館 入館者30万人達成

韓国にハンセン病博物館建設予定 小鹿島関係資料調査に来館

2月20日、韓国カトリック大学ハンセン病研究センターの蔡奎泰先生他一名が来館され、韓国国立小鹿島病院関係資料の調査を行った。同病院は、小鹿島慈恵医院として日本の植民地期であった一九一六年に開設された。

すでに小鹿島病院内には資料館が設置されており、写真や入所者が使用した生活用品などが展示されているが、一〇〇周年を迎えるにあたり、新たに博物館を建設予定であるという。韓国国



小鹿島病院

内でもハンセン病史を広く伝え、資料保存を行おうとする動きが活発化されているようで、当館にとっても喜ばしいことだ。

今後引き続き関係資料の保存状況や資料館活動内容について情報交換をし、相互交流を行っていただければと考える。

来館者の声

看護師 女性 20才 千葉

語りを2人から聞いて大きな衝撃を受けました。改めて病気に向き合うのではなく、患者さんとその家族に向き合うことの意味を学ぶことができました。相手の痛みを心から分り合えるナースになるよう頑張ろうと思います。家族ができたらここに来ようと思います。貴重な体験ができました。

自衛隊中央病院高等看護学院
第五十五期生代表 A・G

講話を拝聴し、資料館の設立当時から精力的に活動し、現在もお語り部としてハンセン病にまつわる悲劇を語り継いでいることに大変感銘を受けました。また他の患者さんの体験談も伺い、突きささるような悲しみで胸がいっぱい

会成果報告」(4会場いずれも9時〜12時)

また5月9日(金)には、前夜祭として映画「熊笹の遺言」の上映や、期間中重監房跡と重監房資料館のフィールドワークなどもある。

ハンセン病市民学会 草津で開催

メイン会場は草津音楽の森国際コンサートホール。プログラムは次の通り。

1日目(5月10日(土))
開会「プロローグ」(12時30分)
／総会(13時25分〜14時)／緊急アピール(14時〜14時30分)／交

分科会「A 療養所の入所者の人権が守られるための制度を提案する」「B ハンセン病患者者の証言集をまとめる必要性を考える」「C ハンセン病文学と読書会の可能性」「D 無らい県運動研究

なお、メイン会場、第2会場、レセプション会場と、会によつて場所が異なる。お問い合わせは、ハンセン病市民学会群馬県現地実行委員会事務局(TEL・090-4623-6538)まで。

になりました。

次世代を担う社会人として、ハンセン病の歴史や社会問題への学びを深めたいと思います。発展途上国ではまだまだ、ハンセン病で苦しんでいる人が多くいると聞き、自衛隊の看護師として将来発展途上国で活動する際には、十分な知識のもとで患者さんに接したいと思っています。(後略)

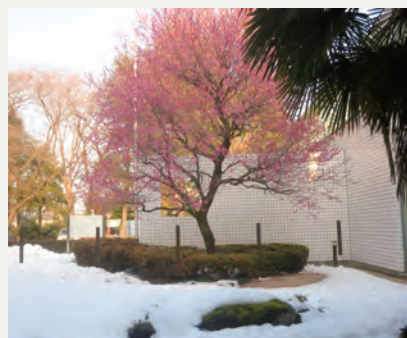
◎次は了徳寺大学・理学療法士科生徒30人より、それぞれの感想文が送られて参りましたが、抜粋してご紹介致します。

▼今も残る差別・偏見、胸が痛む思いです。とても人とは思えない扱いをされたり、家族からも見放されたり、今では考えられないことばかりです。若い私達世代が交流を深め、社会の一員として過去の過ちを見直す必要があることを強く感じました。 M・H

雪の中で紅梅満開

寒いものたえに、地震、雷、火事、親父と言うことがあるが、今は台風、津波、突風、竜巻、大雨、大雪等、天災による恐怖は限りがない。2月は土・日にかけて2度も大雪が降り、各地で様々な被害が出た。全生園でも松の大本が2本も倒れ、自転車置き場の囲いも全潰したが、幸い人災はなかった。

雪の中でも紅梅は咲き、春の彼岸には白梅や河津桜も満開に近く、こぶしや椿の蕾も大きくふくらんできた。3月末には染井吉野も開花、本格的な春を迎える。(修)



資料館前庭の紅梅 (2月16日)